佐藤正英著『小林秀雄――近代日本の発見』（講談社・二〇〇八年）

片岡　龍

一、本書の概要

本書は、本格的な学術書ではない。かといって、内容浅薄な啓蒙書でもない。倫理思想史を専門とする著者の一貫した問題関心にこだわりながら、「できるだけ小林に身を寄せ」、比較的わかりやすい文体で、誠実に「小林の思念をなぞり、明かそうと」した著作である。

本書の構成は、以下のとおりである。

第一章　ランボオ――宿命との出逢い
第二章　ドストエフスキイ――生きる悲しみ
第三章　「故郷を失った文学」から『無常という事』――歴史の試み
第四章　『モオツァルト』からベルグソン――〈たま〉としての母
第五章　『本居宣長』――あやしさの伝説
附　録　小林秀雄年譜
読書案内
あとがき

まず、ごく簡単に各章の骨子を示す。

第一章では、二十代前半のランボオの詩との出逢いが、小林に自らの「宿命」を自覚させたことが論じられる。

第二章では、ほかの誰でもない自己の根拠（「宿命」）への問いが、「生きる悲しみ」の背光を帯びるに至る物語として、小林が『罪と罰』を読んでいることが示される。

第三章では、三十代から四十代にかけての小林が、近代日本特有の大状況における思想の歴史（国民の生活感情の底に流れる「思い出」）を対象化したことが論じられる。

第四章では、戦後の小林の著作が、終戦の翌年死んだ「母上の霊」の直接経験の反響の中で、自己の持続する意識（「ダイモン」）を注視したものであることが論じられる。

第五章では、六十代から七十代にかけての『本居宣長』が、『古事記』の伝説の核心をなす、「神を祀る人にかかわるあやしさ」を捉え切れなかったことが論じられる。

本書に先立ち、著者には小林に関する比較的まとまった論考がある（「思想史家としての小林秀雄」『季刊日本思想史』四十五号、一九九五）。そこでは、本書の第一章に相当する内容を中心としながら、ほぼ第三章までの問題が凝縮して論じられている。第三章以下の内容は、「小林の悪戦苦闘がはじまる」の一文に

圧縮されている。

十三年前の論考では、本書の一つの特徴をなす〈原郷世界〉〈もの〉〈たま〉といった著者独特の用語は、使われていない。その間に『日本倫理思想史』（東京大学出版会、二〇〇三）をまとめあげ、その学問的方法に自信をもった著者が、万全を持して「小林の悪戦苦闘」の内実を、全思想的生涯にわたり明らかにしようとした試みと、本書は位置づけられよう。

二、用語の解説

行論の都合上、本書に頻出する著者独特の用語について解説しておく。

〈原郷世界〉とは、「事物や事象が本来そのように在ったはず」の「外部の世界」であり、「事物や事象が現にこのように在」る「内部の世界」（〈世俗世界〉）に対応している。時間的には「前世や後生の世界」である。また、〈原郷世界〉と〈世俗世界〉の間には、その通行の場であり、流離者や隠遁者を住人とする〈辺境世界〉が挟まっている（『日本倫理思想史』二三―二四頁）。本書では、〈原郷世界〉は「原初の他界」と説明されている（本書三一頁）。

〈もの〉とは、「外なる形而上の存在」である。〈たま〉とは、「内なる形而上の存在」である（本書一六八頁）。〈もの〉は、「原郷世界」に住んでいる。〈たま〉は、〈原郷世界〉との融合を果たそうとして躓いた希求が、内に折れ曲がることによって生じる、私を越えた意識である。

著者の用語へのこだわりが、いわゆる「折口名彙」の影響を受けつつ、倫理学的観点から独自に構成し整序されたものであることは明らかだが、その精緻な体系を正確に理解するだけの時間的余裕は、評者にはない（特に、その原型と思われる『隠遁の思想――西行をめぐって』の初版〈東京大学出版会、一九七七〉と改訂版〈ちくま学芸文庫、二〇〇一〉の異同を確認する時間をとれなかったのは、遺憾である）。

なお、著者の学問体系中の用語とまで言えるかどうかは不明だが、本書では〈土俗のひとびと〉という語が頻用されている。著者の定義によれば、それは「街なかの雑沓を行く群衆」のように、「自己の在りようを語ることに無縁な」存在である（本書一〇五頁）。またそれは、〈文明を担う選良層である国民〉や〈孤絶した個である選良〉とともに近代日本を形作る存在である。ランボオの流離放浪や、ラスコオリニコフのナロオドへの思いも、近代西欧・ロシアの〈孤絶した個である選良〉が〈土俗のひとびと〉と融合しようとしたものとして、近代日本との近似が指摘されている（本書一〇四―一〇六頁）。

以上、著者の用語について、評者自身なお判然としていない部分もあるが、本書評の必要上からは、とりあえずこの程度に止めておく。

三、本書の論旨

本書の全体は、一貫した論旨によって統一されている。核となるのは第三章である。第三章で取り扱われている問題を、著者は「小林にとって決定的な重さをもっていた課題の顕現」（九八頁）と呼んでいる。

第三章の「近代日本特有の大状況」とは、「明治時代後期に生れ、昭和時代初期に青春を送った同世代の選良を等しなみに襲った……現前する家郷の在りようを対象化する身近な手がかり」を見失い、かつその手がかりを「文明を内発した西欧近代の国々」にも「文明が浸透していない国々」にも求め難い状況である（一〇一―一〇二頁）。

本書は、この状況に小林がどのように処したかという観点から、その思想的生涯をたどる形式で構成されている。まとめると、以下のとおりである。

二十代の小林は、ランボオの詩に出逢うことによって、この状況を自覚化した。すなわち、ランボオの詩に影を落とす〈原郷世界（「原初の他界」）〉の内実については、近代日本の〈孤絶した個である選良〉の誠実さゆえ口をつぐみ、そうした自らの「宿命」を、「自己の在りようを語ることに無縁な」近代日本の〈土俗のひとびと〉に、そして詩を捨て流離放浪したランボオの後ろ姿に重ね合わせた。

三十代の小林は、同じ近代日本の状況を、ドストエフスキイの作品に見られる近代ロシアのインテリゲンチャとナロオドとの関わりとの比較を通じて考えた。そこでは、近代ロシアの〈孤絶した個である選良〉の「宿命」が、〈原郷世界〉との融合にもがきながらも、自分を愛してくれる人を苦しめ、ときに斧をふりおろさなければ生きられない人間の「悲しみ」の背光を帯びた物語として昇華している。それは、ラスコオリニコフが、本人の意識に関わらず、十七世紀のニコンの改革によって破門されたロシア正教の分離派の苦行者（ラスコォル）の系譜を引くものとして、〈土俗のひとびと〉の信仰世界に半身を置いているからであった。

一方、近代日本の〈土俗のひとびと〉の生活感情の底に流れる、形而上の存在をめぐる感触（「思い出」）は、きわめて見え難かった。それを求めて、小林は「悪戦苦闘」する。四十代の小林は、日中戦争・太平洋戦争という大状況に黙って処した〈土俗のひとびと〉の知恵を、『無常という事』などの中世の思想の歴史を論じた作品として結晶させた。

終戦の翌年、母が亡くなる。小林にとって、最も身近な〈土俗のひとびと〉の喪失であった。同時に、「敗戦後の小林を囲んでいたのは、街なかを行く群衆に身をさらしても、土俗のひとびとの面貌を見出し難い状況であった。国民の知恵を思想の歴史として対照的に捉える営為は、具体化の足がかりを失った」（二一五頁）。〈土俗のひとびと〉の生活感情に身を寄せることに心を砕いた火野葦平は、昭和三十五年（一九六〇）ついに自殺

し、その死は、十二年間遺族によって伏せられ、忘れられた。

小林は母の死の直接経験を、ベルグソンという迂回路を経、宣長の『古事記伝』を通して、なんとか対象化しようと試みたが、失敗した。それは、小林自身が近代日本の〈土俗のひとびと〉の生活感情に根ざして『古事記』を対象化することを躊躇ったからである。それによって、江戸時代の〈土俗のひとびと〉の生活感情に根ざした宣長の『古事記伝』を対象的に捉え返すことができなかった。

宣長は『古事記』の神を〈もの〉としてのみ把握した。しかし『古事記』の神のあやしさは、〈もの〉神を祀るひとにかかわるあやしさである。すなわち〈もの〉神を祀るひとの霊魂（〈たま〉）にかかわるあやしさである。

ひとが死ぬと、外なる身体は〈もの〉神と即融する。〈もの〉神は、醜悪、汚穢であるが、同時に豊饒なる存在である。死をもたらすとともに生をもたらす根源的な力をもっている。この生の力（「生命の飛躍」）が回折することで、内なる霊魂である〈たま〉神が生まれる。

小林の直接経験は、母親の霊（〈たま〉）に出逢うという形で経験された。しかし、江戸時代の〈土俗のひとびと〉の日常茶飯に根ざした『古事記伝』の死の捉え方に擦り寄るだけでは、その経験――〈孤絶した個である選良〉としての自己が、自ら根ざしているところの〈土俗のひとびと〉の生活感情の底に流れる、形而上の存在をめぐる感触と出逢った経験――を対自化することはできなかった。

最後までそれを小林に躊躇させたのは、「近代日本における不可避の痼疾ともいうべき、形而上の存在をめぐる軽侮と亡失」を背景とする、「母への情愛にかかわる秘められた含羞」であった（二一七頁）。

四、達成点と問題点

以上、なんとか要約してみたものの、著者の文体は平易でありながら、その用語の使用は、その背後に控えている著者の学問体系と厳密に照応していて、なかなか厄介である。しかし、著者の学問体系に対する理解の不備は残しながらも、本書の大筋としては、以上の要約でほぼ事足りると思う。

以下、これをもとに、本書の達成点と問題点について、簡単に評者なりの考えを述べて、責めを塞ぎたい。本書のように自己完結度の高い著作の場合、達成点と問題点は裏表の関係になるので、それを並列して挙げる形で論じたい。

まず、達成点としては、これだけ小林に身を寄せながら、同時に自己の築いた学問体系を小林に本格的にぶつけた試みとして、本書は稀有である。著者の言葉はすべて、緊密なその学問体系から紡ぎ出されており、小林に搦めとられることもなく、はね返されもせず、対象と密接に切り結んでいる。

一般に、小林はきわめて距離のとりにくい研究対象であり、その磁力の強さゆえ、引きよせられるか反発するかの、どちら

かになりがちである。著者が、この二つの間にしっかり身を位置できているのは、その学問体系が自己の内奥に根を下ろしえているからである。

倫理思想史という分野で、〈原郷世界〉を失った現代という切実な問題関心を手放さず、自己の学問体系を、手作業で、精緻に練り上げてきた著者の学問的良心に、まずは敬意を表したい。日本思想史の分野では、依然他者依存の学問体系が横行していると言ってよいと思うが、もって自戒すべきであろう。

一方、著者の学問体系が有力な同調者、後継者を生み出し得るかは、別問題である。精緻は精緻である。しかし、精緻さのみが、学者を動かすのではない。特に小林のような倫理的感発力の強い研究対象が、著者の精緻な体系の中で本来の生気を失っている点は、残念である。

著者の用語が生硬である事実も否めないだろう。またその用語が、日本倫理思想史の全体を貫いて用いられるものであるかも、検討の余地がある。漢文という安定した書記言語の体系に支えられた中国思想でさえ、「理」や「気」といった一定の用語で、その豊饒さを表現しきることは到底できないのに、時代によって支配的言語体系に違いのある日本の思想を、『古事記』など「古代」思想を中心とした用語だけで語られた場合、お仕着せの感を拭えないときがある（こう言い切るには、著者の折口「古代」理解を確認しなければならないのだが……）。

いずれにせよ、著者の学問体系は、やや柔軟さを欠いている。これは倫理思想という学問分野の性質に由来するものかもしれないが、西洋倫理思想への対抗としての日本倫理思想という意識がどこかに残っているための、無理した体系化に伴う硬直現象ではないか、省察を願いたい。近年の日本思想史のアメーバ状態も問題だが、それが思想分析のこのような硬直化に対する反省から起こったものであることも、今更ながら留意したい。

具体的な論点に移ろう。小林論の上から言えば、「小林の思念の息の長さ」（二六頁）に着目し、その思想的全生涯を、一貫するものとして描ききった点は、評価に値する。評者の考えでは、小林は自ら青年期を送った大正時代の知的・文化的体験に生涯こだわっている。小林の戦中以降の姿勢を「日本回帰」などといった概念で、青年期の思念から裁断するのは、陳腐かつ皮相である。

その上で、戦後の小林が、母の死を契機にして、近代日本の〈土俗のひとびと〉の生活感情を具体化する手がかりを失ったという著者の指摘に、評者は虚を突かれる思いをした。たしかに、戦前と戦後で、小林の思想的営為の色合いが、微妙に変っている事実の説明として、この指摘は説得性が高い。

著者が「母への情愛にかかわる秘められた含羞」というのは、おそらくラスコオリニコフが〈土俗のひとびと〉に斧をふりおろした悲しさと対比している。小林は、小林にとって最も近い〈土俗のひとびと〉である「母親」に、斧をふりおろすことはしなかった。母親の〈たま〉に出逢いながら、それを〈もの〉

神の、醜悪、汚穢で豊饒な根源的な力によって生じたものと捉えることはできなかった。

著者の言うとおりかもしれない。というより、これは著者自身が属している時代の〈土俗のひとびと〉の生活感情に根ざして『古事記』を対自化したことによって、小林の戦後の思想を対自化したものである以上、「言うとおり」以外のはずはない自己完結的な論理構造を、本書全体、さらには著者の学問体系全体がとっている。

しかし、著者の学問的一貫性には敬意を表しながらも、この自己完結性は、小林論としては、やはり無理がある。問題を整理してみよう。

著者の基本スタンスは、ほかの誰でもない自己の根拠（「宿命」）を抱えて人は世に生きるというものであり、この考えを著者は小林から獲ている。したがって、できるだけ「小林の思念をなぞり」ながらも、著者は小林とは異なる時代に生きる自己の「宿命」を離れて、ものを語りえない。そうしてこそ、自己と異なる「宿命」をもった対象を対自化できる（この点で、小林は宣長に寄り添いすぎたことで『古事記』の神のあやしさを対自化することに失敗した）。では、著者の「宿命」とは何か。これは、本書には明記されてはいないが、著者が「小林にとって決定的な重さをもっていた課題」と呼ぶ、「近代日本特有の大状況」の問題こそ、著者自身にとっての切実な課題であることは、明らかである。その意味で、実は、著者の規定する小林の「宿命」とは、まさに著者自身の「宿命」にほかならない。

このように著者は、自身の切実な問題関心に即して、対象を自分の色に染め上げることを、小林の「宿命」の論理自体によって保証させている。しかし、この自己完結性は、著者が小林に搦めとられていないことを、小林自身の論理で保証するという点で、自己弁明に堕している。「近代日本特有の大状況」下における〈孤絶した個である選良〉といった問題を論じるに当たって、小林の「宿命」の論理など援用せず、はっきり次のように言えばよい。戦後の民主主義、大衆化の中に根を下ろすことができない自己のエリート意識をどう処理すればよいか、戦後の小林は教えてくれなかった。

したがって、戦後の小林をこのような著者の問題関心にひきつけてのみ把握することには、小林論としては、大きな問題を残している。本書には、『考えるヒント2』から『本居宣長』に流れ込んでいる近世日本の学問の特質（「独学」）に関する考察が、欠如している。評者は、戦後の小林は、自己の「宿命」を「学問」として普遍化していく道を模索したと考えている。

儒学の理解の仕方などで、首を傾げる点もある（特に一八八頁）。そのような理解で、朱子学の精緻な体系に触発されながら、独自の学問の形を築いた近世日本の学問を対象化することは難しいと思われる。この点の検討を俟って、小林の戦後の思想的営みを捉えることの必要性を痛感している。

（東北大学准教授）